
龍が、こい願えば。

当真伊純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍が、こい願えば。

【Nコード】

N0205Z

【作者名】

当真伊純

【あらすじ】

一人の魔法使いが流罪となった。

一匹の龍がそれを拾った。

魔法使い―エルヴィーラの願いは故郷へと戻ること、そして自らを流罪に処した者たちへ復讐すること。

その願いを叶えるべく、エルヴィーラは龍に言った。

「私の言うことを聞きなさい、龍」と――。

流罪

「では、被告人を流罪に処する」

漆黒―裁判官だけに許されたその色の衣をまとう男の声が、張り詰めた法廷の空気を震わせる。それが石造りの高い天井にこだまし、跪いている女の耳に届いた。

そう、被告人は女だった。

魔法使いのローブに身を包んだ彼女は何も言わずに―否、何も言うことが出来ずにただその判決を真正面から受け止める。

長い時間、石の床に跪いていたため、すっかり足は凍えてしまっている。床だけではない。この裁判所の全ての面は石で出来ており、日光を取りいれる窓も少なければ、冷えた空気が身に染み入り、身じろぎをする度に節々がきしむ。

口は、ここに入ってきてから魔法によってふさがれたままだ。弁護をすることもされることも叶わず、ただ彼女の罪だけが読み上げられて今に至る。

手首には、密に文字が記された錠がかけてある。それは、重さ、そして魔法を封じるという点で、彼女を二重に戒めていた。

そう、これは裁判などではない。体のいい処分なのだ。

悔しさをこらえるために俯けば、風呂にも入れず汚れにまみれた黒髪が滑り落ちる。

だが、彼女の切れ長の双眸には全てを燃やしつくしそうな強い光が宿っていた。

諦めを受け入れた者には到底持ちえないその輝きが、この場に集まった全ての人間に向けられる。

彼女は音もなく語る。これから刑の執行までに精一杯抗ってやると。幸いにも彼女の味方は、この場にはいないものの皆無ではない。彼と協力して、なんとか糸口を見つければ。

その彼女の決意を一蹴するかのように、裁判所に黒いローブの一

団が入ってくる。

闇から紡ぎ出したような分厚い衣は、刑を執行するものだけが纏う、忌み嫌われるもの。ローブには口元まで隠れるような大きなフードがついており、どの顔も拝むことは敵わない。だが、彼らが一樣に手にしている杖だけは、緑の石をはめ込まれたもの、黒檀からなるものなど、それぞれの特徴を有していた。

黒いローブの者たちは、女を中心にして円を作ると、呪文を紡ぎ始める。

その言葉は、まごうこと無き移送の魔法を発現させるためのものだった。

流罪の執行は、期間を開けて行われるのが慣例。判決と同時に執行など、前代未聞だ。

しかし、それはこの場にいる誰もが思っているらしい。傍聴していた者たちからざわめきが聞こえる。その一方で裁判官たちは顔色一つ変えずに成り行きを見守っている。

彼らは許さないのだ。彼女の犯した罪を。彼女がここで息をしていることすら。

執行人達は、ただ呪文を紡ぐだけ。まるでこれが数百年も前から定められていることであるかのように、ためらいもなくただ肅々として行進を進めている。

外で、誰かが騒ぐ声がした。

それはよく聞き知った声で、彼が最後の抵抗をしてくれていることが分かった。

しかし、それは恐らく無駄になってしまう。

詠唱はついに最終節に入った。

女を中心として、魔法陣が光を帯びる。その文様の複雑さときたら、通常時に彼女が扱う魔法のそれを遙かにしのいでいる。

全てが、彼女を追いやるため、少しでも遠くに、もう二度とこの地を踏めないように用意されていたのだ。

悔しさに、女は唇を噛んだ。血が一筋、口の端からこぼれおちる。

「何か、言い残すことはあるか」

黒いフードの中の一人―顔も見えないが恐らく声からして男だろう―が問う。執行前に許された最後の言葉なのだと女は確信した。

ここに足を踏み入れてからの喉の閉塞感が、いつの間にか晴れている。最後の言葉を告げる為に、言葉を封じていた魔法が解除されていたのだ。

彼らは望んでいるのだ。みっともなくあかく咎人の醜態を。その断末魔を。

同時に、女は理解した。何を叫んでも、どうあがこうとも、この結果が覆らないことを。

ならば、せめてもの一撃を。

女は、最後の言葉を告げる。過去についてではなく、いずれ来る未来を見据えて。

「私はここに戻ってきます。必ず、どんな手を使ってでも」

女の黒く深い色をした瞳は、暗い輝きをもってフードの男を射抜く。

光がはじける。

疾風が巻き起こる。

こうして、流刑は執行された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0205z/>

龍が、こい願えば。

2011年12月2日17時55分発行